

戦国末期本派僧心裏の都鄙

松 田 紹 典

大龍寺所蔵の頂相では幼児に囲まれた十一世聖瑞元祝が印象にのこる。和尚は明和から享和まで住職した。しかし、智峯、葛門と次第した後継が相ついで亡くなり、晩年悲しみに堪えて更に法灯を守る努力を続けねばならなかった。

仏子を結んだ拄杖を右手に、左手に菓子袋をもち、穏やかな微笑をうかべて三人の幼児を見守る老僧。一人の幼児は拄杖にすがり、二人は和尚の前で菓子をねだっている。私は町内の子供たちにも敬愛された人物と考えていた。晩年の事情を考えると頂相は暗示的である。死の瞬間まで、法灯護持に徹した心意気をたたえたものであろう。

聖和短大の石川教授は幼児の和服に注目された。年長は拄杖にすがる。緑地に雷紋の格子縞の羽織、黄地に褐色の縞の着物。菓子袋を指すのは年中、淡緑の羽織、藍地に白の格子縞。年少は赤味の藤紫に波状の白い縞。これは山形の紅花染めであろう。幼児たちは頭を剃り、赤い帯を結んでいる。この服装は私の幼年期と同じで、小学校入学まで、母の手縫いの和服であった。山形では寛政ごろから昭和初年までかわらなかつたといえる。

先年、横浜在住の方から仏壇の隅にあつたという古文書のコピーを送付頂いた。文面に失礼な内容もあるが元禄十三年の報告なのでおくとくという趣旨であつた。差出人と差出年月日が巻紙の裏書になっている。苦心して天保十三壬寅と読めた。古手簡の記載者は堀田家中の方で、山形居住中十三名を大龍寺に葬っている。堀田家は貞享より延享ま

で支配しているが、墓石図ではほとんどが享保で、元文五年に亡くなった女性が一人ある。佐倉に転封なった方々の心残りであって、百年後に墓参されたと思われる。大龍寺は余程の貧寺と拝見、後より眺めれば、格別の檀家もなく、檀方数もない様子に拝見云々（この文書の正確なよみを最近菊池慶子先生にいただく）。この文面の外に境内図と墓地図がある。この境内図は先住が大正十二年秋に描いた風景と変りはない。天保の配置にある建物は尽く弘化四年に焼失している。聖瑞和尚のころ、寛政前後は山形の紅花移出の最盛期であった。紅花問屋の並ぶ七日町衆の奉仕する大龍寺薬師堂の例祭に開帳も行われている。この薬師堂の祭典は春祭のトップとして現在も町衆の手で奉仕されている。文化ごろの書上書による大龍寺の規模は南北六四間、東西七〇間。この境内にあった建物、本堂八間に奥行七間、庫院五間に一二間、祠堂五間に三間、隠察即心菴六間に七間、外に薬師堂、金毘羅堂、稲荷堂、大黒堂。大龍寺としては檀家は現在同様少ないが、全盛の状態であった。天保一三年もこのような状態であつたらう。

頂相や幕末の境内図より推測されることがいくつかある。政治・経済の体制が一樣であれば、文化的変動もゆるやかである。江戸中期の平民の生活様式は太平洋戦争開始直前までかわらず、都鄙の意識は現在も同様と思われる。

地域では相当な心算でも、江戸や京などの都会からみたら山形の寺などはみすばらしくみえたらう。都から遠いと思うものは都と鄙を心の軸に行動する。この心情は地元文化をになうもの程つよい。都への憧れ、好意と畏敬は同郷人の生活態度、考え方にはげしい嫌悪を感じるか、反対に都的なものに反撥し、鄙的なものに沈潜しようとするか。両者をのりこえないと、お調子ものか依怙地か、または文化的漂泊者になってしまふ。非自なる文化に対する対応が体質的に可能かどうか。新たな歴史的展開、新しい生活様式に従うこと、承服できないにしてもどのように耐えていくか。自分の生活環境にないものを消化するのは苦勞が多い。その断行への意欲の一端は都鄙の意識から生じると思う。大龍寺の歴史にしてもそうである。盤珪が不生禅を挙揚して不生の仏心一つで度生する努力を続けられた。この評判がひろまると秦嶺は不生禅に心酔、その会下に入り、盤珪の横軸を山形に将来した。

百歳光陰一葉那換面改頭無了當野田添得羈躰多業縁牽引入娑婆

盤珪婁 書

雪心は白暎のすすめにより、のち白隠下に転じた古月派の大休の会下に入り苦修している。辺鄙にいと名声天下にひびく人物のもとで地元を超絶した何かを求める気になるらしい。遙かなる異郷、ことばや習慣、その他の格差に苦しんだものか二人の示寂ははやい。大龍寺の先住たちですら、ありきたりに満足せず、臨済宗内の新氣運に関心を示し、それを自からの中に受けとめようとしていた。この状況は戦国末期の東国では尚更であつたろう。

江戸中期よりはるかに状勢の切迫していた戦国末期、関東一円の禅僧たちは長楽寺や建長寺などの強い影響のもとに育つ。その中で多くの禅僧が妙心寺派の流に投じ、本派の發展に努力を重ねた。その新文化受容の心情の一端にふれてみたい。

出羽三山の東南麓、東からの入山口に慈恩寺がある。弥勒堂を中心に薬師堂、阿弥陀堂、弘法大師堂、三重塔、開山堂、その他に八幡、熊野の社もある。現在でも三院一八坊が一聚落をつくり、明治初年は六ヶ寺二八坊あつたといふ。山内宝林坊の舞楽文書によれば一山五五坊、幕府の朱印状は二八八九石であつた。出羽三山の南方朝日岳、同じく東方の葉山周辺の山岳宗教者が戦国時代より団結して一山を形成していったと思われる。一山寺院の指導層は学頭坊であり、祭式・寺院運営の実務は衆徒によって行われる。その下に在家という田園管理層があり、一山組織の底辺に農民がいた。従って、寺院経営の記録はすべて衆徒坊に分有されている。歴史の生きた化石のような寺である。ただし、山の文化財の一部は明治維新によって在家層に移り、敗戦後の土地改革でそれらは古物商の手に移って散佚したという。坊は妻帯修験の世襲制によって守られてきた。学頭坊の最上院は最上氏より攻められて世俗領主をすて宗教領主に転じた大江氏の子孫という。この寺は天台真言など四宗兼修である。形態そのままに現在慈恩寺宗という。

大虫の長沙録(六八紙)に打月説がある。会津円蔵寺主盟が寺域に一亭を建て打月と額し、大虫に打月の端的を露呈

せよとの請いに応えた長文である。当時の主盟は臨済系であったらしいが一山には頑固な密教の徒もあり、のちには一山の運営主管をめぐって真言宗と本派は激しく争ってきた。

瑞巖寺も似たような状態であった。大小の堂宇神祠を護持するため所謂清僧と妻帯入道者が職務を分担して宗教聚落をなしていたと思われる。永祿四年のころ、虎哉宗乙は甲州を発し、妙心寺派の先蹤をたどって関東をよぎり福島⁽¹⁾の伊達郡より瑞巖寺近辺に達した。報告はないが斑寅集に寸評をのせている。

海中に浮ぶ多くの島、水はみどりに砂は明らけく、立止って吟じては夕陽に至り、帰り来る漁舟を眺む。瑞巖円福道場は海辺にあり、雪いまだのこる早春のみち、梅花ようやく南枝に見ゆ。興にのりて漂泊す無戒の僧。宿を得ずともまたよきかな、世界は廣大なり、むりに宿をたのむと申すまじ。宗風を起さんために辺境を歩む、わずかに十王堂に足を伸ばす、ほのかに機織の音を聞く、心得ぬものかな、寺に婦人が住まうとは。

むかしのままにまた、関東以北などにごく普通にある多元的な宗教土壌を若く、純一に宗風を振起せんとする虎哉には肯定できなかった。長沙録にはこのような宗教事情への違和感を示す文はみえない。更に幻住派の影響が強い関東にあって、この派の人々に好意をもつ大虫が逆に政治の表舞台に立つ僧の活躍さえ否定しないようにみえる。その背後にある為政者に対する好意からかと思つたが全く関係ないようである。むしろ僧侶が為政者の指導的立場にあるか、又は施政に実力を発揮することは善と考へていたとみえる⁽²⁾。後中院は里見家、栖徳和尚は小田原北条家に関係をもっている。関東騷擾の源にかかわりうる人々の叡智に期待したのだろうか。

弘治三年、大虫四六歳。湘江つまり相模川であろう。この地の寺を出立して伊勢白子の龍源寺に向い、江南殊榮をたずねる。湘江附近で栖徳和尚つまり明叟宗普と別れた。どの位のつき合いだったろうか。大虫は忘却されて当然と考へていた。しかし、このとき永祿六年には栖徳和尚が大虫を必要としたのではあるまいか。関東北部の土豪たちの動向についての確な情報を求める視察行の途上、この地の土豪に信望のある大虫のもとに立寄ったからである⁽³⁾。

大虫はつねに土豪と民衆の側に視点を置いている。いたましい被害をうけるのはこちらの側である。これまでの戦乱はひどかった。永録四年矢作城に寓居、房州軍侵略、三三節敵軍降退、城中万歳を叫ぶ(八四紙)よろこびがつつわるようなめでたい文である。今や東関八州諸将争功戦々競々(八紙)永禄七年には上杉と北条の争いが再び始まる。小田氏治は北条・武田にくみしたため、上杉軍の猛攻をうける。民家・名藍、古利ことごとく灰となる。手足のおく所もなく総州の曹洞宗の光福寺に旧交をたよって門をたたき、⁽⁴⁾ようやく安眠をえたよろこびを記す。更に小田城にもどり、戦没者への施食会を行う(一四紙)。そして、下総の地福寺(七三紙)、岩城竜勝寺と戦乱に追われて漂泊している。天正三、四年は戦鬪の記事多く、矢作城外戦死者七〇余名の弔斉(九一紙)新九郎被箭、孫四郎羅刃、いずれも一八歳で闘死している。大虫のさすらう総州より会津まで、現世の村僧は三人五人と隊を組んで俳徊、あるときは衲衣、あるときは鉄甲を着し、孫子、呉子の兵書を学んでいる。越守と湘府、この二大勢力が関東にたえまない戦争をひきおこす。この戦乱をどのような形でも、また一時なりとも終息させうるのなら僧俗はとわない。このとき、主将の意志を決定する一言を吐きうる僧がいるのは幸福である。和平が栖徳和尚の金口より出たものと絶賛する理由である。

このような戦争の巷、故里から完全に逃げ出さない理由は二つある。永禄五年、大虫の苦難をみかねた正安寺より安全な当処に避難せよとの招請があった。これを謝絶して大虫はいう。旧冬以来、当国の騒屑、城外の仏閣一時に焦土となる。今あえて、この請をうけて他処で傍観するとなれば檀施をうけてきたこの身ゆえに、多くの罵嘲をうけるであろう。寸薪粒米檀恩信施 予粉骨碎身難酬之(六一紙)もう一つは故里の自然の美しさである。

故里の風光にしても、現実の社会を投影する。干戈裡に花を看る。⁽⁵⁾春景を詠じながら箭槍の響にみち、のどやかなる様子はない。風雨の来襲におびえる花、戦鼓に追いまくられる民衆のようである。風魔の指揮する一打の鞭、満城の桃李は一挙に引きしりぞく。花の援軍はないものか。老松が三ヶ月をひきしぼって風魔に立向う。風魔、雨敵に対抗する織月の弓を肩にした老松。これは何者の象徴であろうか。

関東の風土は雄大である。芙蓉鏡とは霞ヶ浦のことであろう。⁽⁶⁾大虫は秋風吹き抜ける湖辺に立ちすくむ。おしどりが来ればおしどりが現われ、鷺が来れば鷺が現われ、両群湖面に交錯しつつも、一点の塵を止めない。南北より関東を襲う湘府、越守の大軍のようだが、鶯鷺の大群は湖面を汚すこともない。また自然は群雄の興亡などものともしいというつもりか。故里はすべてをのみこみ、その風光はそれとどきに、無限の美の相を現わしてゆく。湖面を美なりと眺め大なりと誇った少年は今や白鷗の友たらんとする白翁になっている。芙蓉鏡は人心そのままにいろいろな意味をかわらぬ富士とともに映し出してくれる。

昭和四七年、死を目前にしていた先住の伴をして、大虫の足跡を巡覧した。当時、先住の体調をおもうのみで長沙録には何の興味もなかった。このとき霞ヶ浦を東から南へと半周して、長沙録の舞台を垣間みたのである。湖畔の宿で灯火を求める虫の多さに驚いたが、金の連波に輝く湖面、帰帆、根本寺附近から眺めた夕景はなお眼裏にある。待月楼五篇⁽⁷⁾にこの思い出が重なる。ただ一野僧と卑下しながら、大虫の志は壮大である。水涯に登る月を一樓に待つ。やがて、闇を照す月のように、自分も普く衆生を教化せんことを願う。長沙録には多く酒が登場する。よき夜になにを嘆く、天はあくまでも晴れるのに月は孤独、盃をあげる我もまた孤独、月の上るとともに影をあわせて三人となる。若い頃詩人を罵倒して奸賊と呼んだ。いまこの感興をえて、何の面目あつて彼らにまみえよう。月に片雲かかれば、明鏡に塵生じるが如し。これでは天下に平和の美粧がととのうのはまだ先のことであろう。月の天女を把えて西施に仕立て、あくなき戦いをつづける英雄を悩殺せんものを。

かつて、布袋の詩、一鉢千家飯孤身萬里遊青目親人少問路白雲頭と口ずさむと、ある知客さんができてない人だといわれた。一鉢千家飯なら孤身萬里遊は当然のこと。親切な人が世に少ないのも分り切っている。初句ですべては云い尽されている。しかも、ひたぶるな托鉢行の雲水にはこの語すら不要だ。私は反論した。布袋は詩人である。禪の行者でも一般人でもわかっていることをいう必要はない。無弦の楽人はないように沈黙の詩人はありえない。いわず

もがなのことを敢えてとくとく口にする職業が詩作者ではないのですか、と。

戦國の間に生きる民衆の生活や故里の風土を賛美しながら、地元にあつて大勢力に気を配って生きる土豪たちの文化護持の姿を温かく描き出している。その周辺に興味あり気な文化人たちが遊弋している。このような人々にかもし出される遊戯に大虫の好嫌がよりよく示されている。これを長沙録からみてゆきたい。まず第一は舞楽である。⁽⁸⁾

大虫は例によって楽の淵源から説きおこし、日本では雅楽として王侯貴族の邸で演じられてきた効用を綴る。雅楽をもつてわが老を慰さめられる檀家国分氏の好意に感謝している。次々に曲の種目がすすむ。まるで舞楽の内容と成立の歴史をまのあたりにするたのしさ、おもしろさ。この一日で西王母宮三千歳の寿命をもすばらしいとは思えぬ。

さわやかで、華やかな演出、貴くきよらかな歌と舞。これは仙境のもの、彼らは不老長生の妙術をもつ、わが白髪もまたたく中に緑なす若さをとりもどすであろう。洗練された舞の袖こそ、古来都風の清興である。霓裳の一曲などは唐の玄宗のみよく知るところ。現世にまのあたりにしては月宮殿行も価値なきものとなる。

第二は絵画である。長沙録には諸芸のうち尤も勤むべきものとして絵画を挙げ、絵画論風の長文二、大虫自身の作品の送り状や返札に対する詩など二がある。

画論の第一は会津城下興徳寺に乍住したおり交際のあつた相鑑斎の作品を評したものである。相鑑斎は常陽の産、大虫と同郷であり丁卯ごろより画名高しという。この頃、会津城修理のことあり、雪村など著名な人物が結集していたと思われる。当時の会津大守芦名盛氏は文化的素養も充分な武将であつた。相鑑斎より、出山釈迦、渡江達磨の二軸をおくられ、道釈画のはげしい気迫に驚嘆。釈迦も達磨も目前に再来、まさに筆端に心仏を吐き出す。この妙才は胸中一点の埃もないからであり、老人の手中にはあらゆる画人の技量もよりこまれてゐる。と絶賛している(五七紙)。

啓書記以降数代を経て、雪村、相鑑斎など相当な技量の水墨家集団が霞ヶ浦北辺にあつたと思われる。

他の長文は平幹繁の筆淡墨二六対、親友福泉和尚より不意に贈られた作品に対する論評であつた。⁽⁹⁾ 大虫は絵画を好

み、鋭い鑑識眼をもっている。精神性を尊ぶ水墨画も陳腐化してゆく戦国末期、気迫のこもった画人を東奥に見出した。王侯も絵画制作の技術をもつべきだと信じ、大虫自身も墨梅の画技をふるう(五七紙など)。この度は地方領主の絵をみて、蘇軾のことば、よく畫くものは意を盡す、形を盡すにはあらず、この古人の言によせて、きつい寸評を記している。教科書どなりに描いて得々としているような作品に接し、我慢のできない泥臭を感じたと思われる。随分皮肉な意を含んだ文である。老いの現在に至るまで、いくたびか画技に誤りを犯し、ついに丹青の実に過ぎたるかと疑う。今この景をみて、一度に良工の苦心を知りえた。古人の句を借り自己反省の具として壁上に糊し、わが家尺壁の重宝にしようというのであろうか。

現職の僧俗が職務上の必要から大虫に交際を求める例も多い。奥陽延福寺(瑞巖寺)の實堂宗中(五二紙)、八大伝にも登場する上総の正木大膳(二〇〇紙)などである。恐らく手簡持参者に本旨を語らせるためか、表に要件をあらわにしないのがつねである。しかし、裏の内容を全く感じさせない文もある。大虫が好意をもって参加した清遊に関する内容のものである。なかでも茶のよおしと称する記録もある。招待をうけて戸惑いを感じながら、茶の素養に感銘している絶句、呈長吉寺主盟は興味ある内容である(一五紙)。梅尾茶之湯又和漢会これに会するもの縑素六七輩。八月十六日也。ひざをつき合せるように並んでいても、茶会についての素養では天地の隔りがある。これが再度あつてはたまらぬと立戻って、主盟の柴扉をたたけば、主は落葉を掃き集め焚火のところ、湯わかしかから安い茶を出してくれた。この会の場合、和歌三五景を味ったとあるが、清話に重点があるようで、都風の寂茶の感じがする。

この上品なよおしと対照的に好ましい茶の集いとして賞賛されている例もある。招待側の主人は土豪階級で、現在には閑職にある人らしい。¹⁰⁾ 風流の高士、襟宇清純、一点の俗気もない人物と評する。他国の文物を巡察、とくに名所や和歌の旧蹟をたずねて、自からの錦囊に入れて財産となし、雪月を友とし、風花を客となす。仏教に心を傾け、曹洞宗の法戦場に奮進し、僧侶かおまけの活躍をする。また世間の各処に自在の力量を發揮する。この方との喫茶商量

は今の世に珍しいつどいとなった。時たるや五月雨ふりこめて端午の季節にふさわしい菖蒲、杜若。昼食前の茶を吟味する雰囲気は陸羽の評品を彷彿とさせ、嘆声なく鷗岸に炷するさま魯直の閑味が念頭に浮ぶ。やがて、主の命により六七人の若人が舞の袖をひるがえし、扇をかざしてうたう。盃がとびかえば禅心も泥水をすいこんだ古綿の如し。思わず老僧も手は舞い、足はふみならず。戦乱たえまなく続く現在、この間にも太平への礎はきざされつつあると感じる。めでたい。めでたい。思いもかけず蓬萊仙島に坐するが如し、昇天の仙術が一盞の茶か。僧俗、交わりを結んで盃を挙げる。老いたるわれも思わずうたい出す。つどいに酔うてのめりこんだのか。鹿島斎宮曲水宴(四〇紙)でも同趣の感懐をもっている。詩あり、歌あり、詠ぜぬもあり、罰盃とびかう太平の逸事に世事も仏事もすべて放擲してあそびの一刻にうち興ずる。酒も相当に飲み、自分の教養も存分にさらけ出す。感に合致すれば喝采するだけである。和歌や詩、宗教論更には歌曲や舞踊に至るまでが本膳で茶や酒は添物か、またはその逆か。どちらでもよい。あそびに上下の差をもうけ、空間を限り、人数を限り、特定の仕方に限定して、純化をはかるような風雅の会を大虫は忌避するかのようである。

清遊とはその内容はともあれ、その質は好ましい和をつくり上げてゆく人の組合せで決定する。大虫は妙心寺派の拡大を心にかけてながら、地元の宗教及び宗教者に対しては少しも無理しないようにみえる。大虫が他宗派の人々にも温く迎えられる、遠慮勝ちにでも押しかけてゆけるのは単に同一地方人だからではない。足利学校や長楽寺などでの出合いもあったろう。しかし、大虫は関東の南北、僻陬の他宗の人々にも、彼は偉大であるが、こちら側の人物であって、非自ではないと信じさせた性格ひなびたふるまいがあったからであろう。

戦塵に追われて民衆は身のおく所もない。武士にしても、戦闘に従ったものは軍神の秤を示すところ、一方は凱歌を挙げて財を得、他方は面縛負荆の上、降を乞う。戦争のとはちりは無力なものにおちる。民家は狼烟の具、名藍古利は灰燼となる。狐影の大虫は下総の一隅光福寺の丈室をたたき、主盟は衣に帯せず、はきものを蹴散して出迎えて

くれた。戦乱の労苦は湯にあう氷の如く消え去り、ようやく安眠を手に入れた。

光福寺は多少旧識であつたらう。しかし、更に東の洞泉寺を訪れた文に旧相識の如しとある。初対面に近い人であらう。幽邃な庭園、野鳥が群れ、竹楼に茶を味わい、酒をくむ。俗塵の至ることなき仙境、蓬萊山の一遇を巨靈神の大斧で割り取つたようだ。この神の大斧は悟空の如意棒一振をも防ぎきれない。西遊記では悟空が天界をさわがすときに道化役を演ずるが、巨靈神は大きなことをやる表現として数度長沙録に登場する。心の通いあう至楽を得るのは必ずしも旧友とはかぎらない。

名のみ心得ているが面識のなかつた風流人との対応が長沙録にある⁽¹⁾。この話と同年か否かは分らないが、内容と関連ある文が外にある。乙亥春之暮 於矢作城中避兵塵 于六日之夕俄然雷雨起 如傾盆 破屋上漏下湿 無所移 屋内戴笠到五更云々(二〇〇紙) これは天正三年春すぎたころである。しかし、渡辺金吾公がきわめてすぐれた友兩名を伴ないたずねたのは秋のことである。戦争以来、来客の往来は断えて草はのび放題、蘚苔のおおう道に人跡はない。近頃、菴の修繕はしたものの漸やく風雨をしのぐのみで、屋内でも傘を手放せない。野菜根に添えるに市茶を煮て供す。日は西に傾くが飲興つきがたく宿泊せよとすすめたい。しかし、その状況ではない。翌日、禅寺での茶話と隠逸なもてなしを感謝する手簡とともに、丁寧につつんだ茄子一籠がおくられてきた。寒山老人は茄子を材料に雲衲を教化し、煬帝は茄子を絶賛して紫崑崙とよんだ。風味は口中にみちる。正に貴重なおくりものである。粗末な茶一盞だけの僧俗のつどい、これにもくめども尽きぬ味わいがある。戦後は荒れ果てて、客のおとずれとてない。君の來訪を得てようやく昔のみにちに人跡が残つた。酒を出そうにもなかつたにちがいない。もう少しゆっくりしてはともいいかねた。この状況のもとで彼らにどんな物語があつたのであろうか。こちらの窮状を問題にもしない。漸やく出された一盞の茶をこころよく味つて下さり、さり気なく茄子一籠をおくつてくれた。大虫は泥臭のない心くばりをここに感じとつてゐる。

この時代、喫茶も酒宴も景物であり、主たるものは和漢の会であった。内・外典、和書を介して、片言隻句にいみをもつ詩歌をつくる素養は一朝の努力では不可能である、更に事態に即応する詩的ひらめきは天成のものであろう。

長沙録に連歌の記事がある。風流の定義は六芸に達し、文武倭歌のみちを兼ね備えること。この定義に叶う人物は闘争に終始する今日では得がたい。故に下層武士もあげまきの童もその名を心得ている。この人物も戦乱にまきこまれて流浪し、今は矢作城に寓居している。⁽¹²⁾仲冬のなかば、大虫の寓居をたたき、数刻の清話をもった。吹残る紅葉の一片二片寛より流れ出し、小池に浮んだ。彼はこれを眺め、むすびとめよ云々と詠じ、自分もすぐに詩でこれに応じた。一日このようなつどいがつづいた。古徳は竹寛二三升の野水、松窓に七五片の閑雲と詠じ、李白は廬山の瀑布と題して吟じた。飛流直下三千丈、疑うらくは是銀河の九天より落るか。ほんの数尺の寛のしたたりが歌の力によって、その名は諸方にあふれてゆき、末は李白の吟ずる廬瀑三千丈ほどにもおもわれるであろう。三方の山ふところから豊かにしたたり落ちる水、本堂近くの小池に集まり、やがてはるか山麓の聚落に流れてゆく。あの佐原大龍寺の風景がおもい浮ぶ。かの発句がどれ程のものなのか、ほめすぎではないのか。この清談の裏で大虫は得る所大きかったのかも知れない。

連歌では伴鷗斎も長沙録の四作品に登場している。

長時間一座して発句にこめられた課題を風と約束事をつないで巻き上げてゆく。太閤記では本能寺襲撃を前に愛宕社で連歌の会を催したという。権謀術数が横行し、謀略が幅をきかず戦国時代には正確な情報が求められる。連歌師の効用は大きかったと思われる。⁽¹³⁾

伴鷗斎は文芸を家業とし、都鄙に名声を馳せ、おもいをインド、中国にも及ぼした。めぐりくる季節を客とし、季節の景物を良友となす。また、連歌師は行脚する。日本武のあとを尋ねては筑波に秋月をもてあそび、菅原相の道に熱意を傾ければ北野の廟に寒梅を拝す。諸所の寺院をたずねては知られたる現住の美点に納得し、史上の聖賢のあと

をみてまわる。この努力の故に、彼の詩歌は作るや否や全土にひろまり、小児まで口にするに至る。元來、倭歌は禪と縁がふかい。むかし、達磨大師が渡來され、大和片岡山で聖徳太子とあいまみえた。ここでの二首の歌が世に伝えられている。歌も禪も教も本來一に帰す。

正月には国府台合戦、春のはじめに上杉軍が小田城を襲う。永祿七年はさわがしく始まった。大虫五三歳である。戦いの喧噪に追いまくられて、古利に宿をえて冬を越し、乙丑の春、梅花ようやくほころびる頃、伴鷗齋が歌集を携えて來訪したのである。大虫は伴鷗齋の詩の中の灯の一字の理解をもつて、達磨の骨髓を得、聖徳太子の眼目を奪うとたたえた。この灯こそ、心灯をつたえて万世に至り、古今に輝やき、万世まで照し出す。心灯の明るさは天地とその徳を同じくすると祝意をあらわしている。

伴鷗齋は伊達家に臣属し、関東管領の近辺で活躍した。自由人の立場を守る形で政治的に暗躍したと思われる。大虫の力をかりる何らかの目的でもあって大虫の門をたたいたのであろう。禪と詩の対応は大虫はその目的の話にはのらなかつたと思われる。杜少陵いわずや。万事すでに黄髮、残生は白鷗にしたがうと。この話を借りて、予は隱遁の素志となすか。水雲とともに漂泊する僧、これよりは鷗に從うといえど、鷗の方でそれを許すかどうか。

大虫は更に紅梅一枝に詩一篇をかけて伴鷗齋におくた⁽¹⁴⁾。よこなぐりの雪もよし、雨も味わい深い。君よ、今夜はこの花の下に宿りせよ。春風の来る日は未來とともに知るべきもない。

つづいて次のような文をのせている⁽¹⁵⁾。紅梅一枝に詩を添えて伴鷗齋におくた所、伴鷗齋は倭歌で唱和して返送された。そばにいあわせた長興老和尚が撃節で調子をとリ、大雅で声をはりあげた。音声は朗々と耳にみつ。これから繙素の事に執して花に月に推敲する約束を守れば慧遠・陶元亮・陸修静のあの社盟も掌の中に入ろう。虎溪下の三名の如く、歩む道が儒仏道とちがっていても、高らかに笑いあえる関係、少くとも文芸の世界で交際することを伴鷗齋に願ったのであろうか。

花にまつわる話でも、萩を中心に清遊する文が先の紅梅の話の近くに⁽¹⁶⁾ある。地福寺は佐原市の大戸、四周に小丘をめぐらした好地にある。本尊は建長寺のような立派な地藏菩薩。背後の小丘の一つに手力男を祠る大戸神社があり、寺域が接している。幕末、勢のよくなった神官が和尚を西瓜坊主とくさしていたので、西瓜ならくされねぎより子供が喜ぶわいと言いかえしたという。大虫は地福寺の門をたたき、清話をつづけていると風流客があって、宮木野の萩に酒一樽をそえて土産とした。この話は楽しい文面におもえる。風流客は伴鷗齋とはちがう胸の小琴にふれる好漢であつたろう。酒など添えられなくともよい。矢作城が襲われた乙亥の春、城外ごとくが焦土となり、大虫の菴も兵火にかかり、庭前の梅や松まで焼失した。杜甫のいう時に感じ花に涙をそそぐ、成程このような場合か。感慨を新にしていると、翌春、光福老和尚が紅白の梅花数枝をおくって下さった。大虫は恩義の重きこと華袞の寵を越ゆるものと感激している。⁽¹⁷⁾

伴鷗齋の梅、地福寺の風流客の萩、この二文につづいて清交汚交の論がある。⁽¹⁸⁾このあたりの人間関係を例話として、大虫は友人として好ましい関係を論理的にまとめておく必要ができたのかもしれない。古人の説では交友に等差があり、扱んで交わるのは清交で、交つて扱ぶのは汚交である。更に盟約を違えないのが君子の交りという。しかし、戦国のこと土豪たちの離合はつねのことだし、うまく対処しなければ滅亡につながる。利害をこえ、境の順逆にもかかわらぬ関係が心の中だけならともなく、実践的にまた現実⁽¹⁹⁾にありうるものか。ただ気があうという関係は遠近距離をへだててもくもの糸の如く細くとも続くように思う。

乱世がいくつかの勢力圏に統括され統一への劇的展開にむけて歴史の歩みはやまる天正五年、大虫は佐原大龍寺で六六歳を迎えた。関東はこころばらく戦闘は少なく、鹿島斎宮庭上では梁父和尚発願の蘭亭会が催された。雪菴出題、落後憶花に即詠五十吟、不賦詩者一五、会者四一。そして舞楽、酒宴と続き盛会であった(四〇紙)。実に楽しそうに平和を享受しており、好ましい文になっている。この宴の数々月前、天正五年十二月十二日と明示した暁の夢の

記がある。⁽¹⁹⁾ 大虫が雲巖寺に入り、天正九年、東山にて宸翰を頂戴した。この時、数年前を回想した文である。この夢の記には開山仏光国師、鎮守天満自在天をも登場させている。関東に大きな影響をもつ大伽藍入寺の必然性を他に示すこと、次いで責任の重大さをのりこえて、大寺院入寺にまつわるさまざまな軋轢に敬虔に対処しようとする祈りをこめた執筆意図と思われる。

関東から東北に妙心寺の教線拡大に努力した初期の人々に戦鬪的、強引な人が多い。佐原大龍寺年住一年、北進して宇都宮興徳寺、更に関北より福島県に入り、普応寺で刺殺された済菴宗鎮の猛進。伊達家の重鎮で東福寺派東昌寺大有康甫に妙派の発展を知らせ協力を依頼する天心智覚の手簡⁽²⁰⁾はその好例である。結局は成功していない。大虫は性急ではない。この待ちの精神は非自を自にとりこみ、機能化するため必要な要件である。大虫はこの精神をもちつづけた。かつて佐原大龍寺の祖堂に中興開山として、師江南の牌を入れて、雲山黄龍を妙心金翅が吞却し改頭換面を宣言したのが元亀三年、大虫が師兄済菴のあと大龍寺に乍住したのは永禄二年である。故に長楽寺系より妙派に転派するのに一〇余年を要している。

長沙録には黄龍派や仏光派など地元有力のある臨済宗各派との関係に慎重を極めたあとを止め、他宗派の活躍を掣肘することは全くない。このことが臨済各派および曹洞や真宗の方々も大虫の働きに好意をもったのであろう。しかし、激しい長文の批判が長沙録にある。天正一〇年夏佐竹郡における洞上密宗宗論、つまり僧侶たちの闘争であった。⁽²¹⁾ 密宗の主張は二箇条あったと大虫はみる。第一、塔婆は高野山の四九院に始まる。この趣旨に由来する塔婆をもって他宗の曹洞の僧侶が供養することは許せない。第二、塔婆に曹洞の僧侶は梵字を記す。梵字の秘咒は密宗の秘伝である。伝受のないものは書くべきではない。

しかし、実状は議論ではなかった。一問一答もしないうちに、刀子を懐中にした密宗の徒二百余名が曹洞の衆を打囲み大惨事をおこしたというのである。この事件を伝聞した大虫は宗教学的見解で批判を始めている。

まず文字である。文字の起源は八宗祖師はおるか釈尊の時代より超かに古く、二兆七億六万二千八年前に逆上るといふ。この論拠はわからない。三世の光などの表現と同じく、上代人の超大な年齢をもとにしているのであろう。言語と文字との関係も明らかではない。次に各国文字・言語の関係を論じる。仏教はインド・西域・中国と全く異なる文化圏を往来して発展してきた。ギリシア世界である地中海世界中心に布教したキリスト教とは異なる。併立する巨大文化圏を往来した仏教伝道者の努力は想像を絶するものがある。釈迦方志は梵書、胡本、中国文字を各個別々に成立したと考えている。梵書は梵天が天より下って書をなし、中国文字は人間の蒼頡が鳥跡より創成したという。しかしわれらの用いる仏教経典は梵書より翻訳された。各国語、文字に全く共通の場がないとすれば翻訳自体不可能である。翻訳の正しさは科学的証明では不可能であり、権威による正しさを信じることは学とあいられないと西欧現代の哲学者はいふ。ある宗派では漢訳経典が仏陀の言葉として、信仰対象にさえなっている。仏の言葉が正確に、言外のいみをふくめて漢文に翻訳されていると信じたからである。梵文経典が仏語かどうかは別として、梵文でのべられた仏意を漢文経典に余すことなく盛り込んである筈である。仏語、仏意を正しく伝承していなければ翻訳のいみがない。経典崇拜は足元からゆらくことになる。ところで法苑珠林は言語にもとづく文字の同一基盤説をとる。梵書の創成者を長兄、西域胡語の創成者を次兄、中国文字の創成者を末弟とする。大虫はこの同一基盤説を採用している。しかし、大虫の説く所の商迦羅天、鼻仲天夫妻神の三子、波羅摩、迦羅摩、蒼頡のうち、梵書と伽書を制作したという二兄の典拠を私は見出せない。法苑珠林は釈尊が学習された梵書名をあげる。そのなかに、阿伽羅書、曹迦羅書など類似した音を見い出せるのみである。珠林には次の文がある。造書の主はおよそ三、長は梵その書は右行、次は佉盧その書は左行、少なるは蒼頡その書は下行。梵と佉盧は天竺に在り、蒼頡は中夏、二兄は書法を浄居天にとり、末弟は華を因とし、鳥跡によって文を画く。大虫はこのような書籍の記事を参考にしたのかと思われる。かくて、梵文経典も漢訳経典も等価値となり、文字も**ワタシ**も**マツ**もアイウエオも同じこと、何も密宗の所属になるものではない。しかし、

いかなる文字でも文意でも、書法や文法に学習が必要なのは当然のことである。理解しないで梵文を使用すれば大きなあやまりを犯すことになる。

四九院は仮城を立てて、衆生の迷いを救済する仏の具にすぎない。四九院は五六億七千万年後、弥勒菩薩が成仏説法するとき補助される仏たちの安住処である。恒説華嚴院は毘盧舎那仏が主となる所、常行律儀院は積尊の司どる所、院とは波演那、仏の安住処である。しかし、高遠な宮殿ではない。宏大無辺な仏の自内証である。また、仏はこのよくな心境に安住してばかりもいない。凡となり、聖と変じ、天に入り、地獄に現われ、救済すべき境遇に応じられる。仏は生死往来八千度というが、これは観智形成の深さの表現である。また、仏は沢山おられる訳でもない。一仏のみである。一月天にあれば、あらゆる水辺に月影がやどるようなものである。仏はあらゆる衆生の救済のために応病与薬の教えを説かれ、行為として遺された。この働きなしには仏は乾屎橛、この意味を失えば仏経は不浄故紙となる。梵文、四九院は密宗の所有と主張すること自体、無学の証でしかない。

更に大虫が最も批判を強めるのは宗論の形式である。各宗の発展のためには宗論を行うべきである。そのためには天鑑無私の条件をそなえなければならない。君臣列座して、奉行を設けること、両者とも相互の主張に傾聴すること。宗論の趣旨にもとづき長短を決すべきこと。このような三項を挙げ、その範例として、わが宗の有名な宗論を挙げる。所謂元弘の宗論を紹介している。昔日醍醐帝のおりと記し始める。勿論、後醍醐帝のおりといわれてあり、大虫の参考した書からの引写しの際後の脱字があったと思われる。この宗論を正中法論ともいう。正中は元亨四年一二月に改元された年号で、元年には正月はない。この宗論は大灯録にも座主記にも花園院宸記にも見えない。宸記正中二年正月廿八日の末尾に次の文がある。

伝聞 禅林寺長老鏡円入滅云々 是當代帝師也 於宗門有其名 去年被請 而諸叢林皆以不受 是只以法門為先 不知叢林之法云々 當世以才学為宗 更無鼻歟 法滅之期已至歟 可嘆息々々々 或云為盗人被殺 或云於路

頭殺書 不知誰人云々裏書 後聞 殺害事虚説 只頓死

宸記によれば元亨四年正月は公式行事で多忙をきわめているが、先の入滅の伝聞につづいての文を読解する必要がある。昨年諸叢林に召請があつて宗論的法会でも行われる筈の所、鏡円の一統のみが参加したとも推測される。

大虫の引用した宗論は正中元年宗論記と同一書であろう。国会図書館所蔵本の復写を入手した。これにより、大虫の引証の省略部分をも知りえた。しかし、宗論には建立天龍相国各五山の文がみえる。足利幕府は草創以来南都北嶺の勢力に対抗するためか、夢窓を中心に禅を保護した。義満は天下一統のあと精神文化でも自から支持する禅の優位を決定しようとしたに相違ない。五十十刹の制はかくして後小松帝の至徳三年に誕生した。このような背景のもとに宗論は書かれた。そしてその主催の最高責任者として後醍醐帝をえらんだ。宗論の作家は幕府側の人物で、帝への痛烈な皮肉を放ったのかもしれない。しかし、この劇的な小論のもつ禅の優位という趣旨は地方の禅僧の心にも史実として堆積したのであろう。

現在でも関東以北には名儀のみとなった天台・真言の寺が多い。私の友の中にも百姓坊主と卑下したり、神官になつているものもある。現在では小堂を附属させた普通住宅にすみ、一般人と少しも変らない。往昔は修験者として、民衆に直接接触した親しみ深い宗教家であつた。戦国中期より日本海から曹洞宗が教線をのぼしてきた。只管打坐より新しい験力ある祈禱の宗教として民衆に接した。戦国末には山形・宮城の他宗派を圧倒、福島南部より北関東にかけて進出、在来の宗教と激突した。この勢力にもっともはげしく闘つたのが同じく祈禱を伝道の具とする密宗であつた。現在でも関東南部は密宗、北関東は両宗派が拮抗している。密宗の闘争心というか、愛宗の感情か、ともかく戦国末の宗派防衛に成功したことは事実のようである。

大虫は結論している。仏教各宗はすべて仏の金口に発している。ただ、どう実践するかが機器によつてちがうだけである。念仏もよし、題目もよし、坐禅もよい。ただ不自讃毀他でなければならぬ。仏教各宗が自宗派の存在性を主

張して仏道に精進すること。これのみが西天にかかった仏日を中天にひきもどし、再び光輝あるものになしえよう。関東・東北南部に活躍した地方禅僧としては大虫の気宇は宏大である。仏衣を着し、仏経を誦し、仏名を唱えても、心に慚愧なければ俗人に等しい。洞密の宗論の如きは貪欲と我執に発するのみ。

大虫が最も嫌悪するものは権力者、文化人、宗教者の如何をとわず、鄙的泥臭である。何を扱っても低次元な視点に終始する。仏教はじめ文化全体に目を向けようとしなない。ひとりよがり、自分の視野のせまさに気がつかず、気づいても改めようとしなない。僧侶にしても宗派のちがいを論理的に討論する見識もなく、相手の見解を耳にし、吟味する余裕もない。貪欲から発し、感情的な愛憎のみが先立ち、ついには腕力に訴える。

故里の自然は雄大である。しかも喜憂にどのようにも応え、感興をおこし、わが心に詩の種をまく。長沙録は自然に多くの主題を求めている。愛すべき小動物、樹木、庭園、石、湖水、月、秋風、銀河、贈られた梅や萩の一枝にも好感を示す。

人為の範囲もひろく主題とする。第一を絵画とする。非自在に解釈・把握して自の世界につくり上げてゆく無法の努力だからと思う。ひたむきな表現が発揮されるものに舞と歌曲がある。長沙録は年少の真面目なしぐさに三種の長文をつくり三度感銘している。茶も多く描写されている。これは連歌と同じくなまを必要とする。その間の気配りに本領があるように思える。聴鶯や読書のようなわけにはゆかない。舞も絵画も観賞という分野になると世俗的気くばりやら、強い自己表現である好嫌を伴う批判がついてまわる。

一方は友を呼び、他方は個に沈潜する酒と夢、この両者を長沙録は巧みに自己主張の具として利用している。生育した環境によって素養が築かれ、その範囲で、判断基準をもうけ好嫌正邪の判定をする。人間性は長い歴史の所産を背負う種子である。対内外への処理に個人差は大である。自にあらざるものしかも強い影響をもつものに接す

れば獲得か、拒否かのいずれかを選択し、それを達成する努力をする。撰取しても、自のなかに非自として違和感をふくらますか、うけとめたという充足感との間に内部葛藤をおこすか、または完全に自の機能の重要な一助とするか、どちらかであろう。

大虫はかつて禅の一中心であった関東に生れ、各派と接触して成長し、やがてそのすべてを放棄して花園の流に投じた。その受容には禅の本質とか師の人格とか仲間の動向とは別な面もありうる。関東の宗教、とくに禅を支えている文化土壌とそれに緊縛された土地人の精神、この風土性の一部に泥臭を感じた。他方、大虫の好感をもつ洗練された室町文化を消化し且つ将来性を予見される新鮮さ、新時代に応えられるゆたかな内容、妙心寺派の誇号するこれらのものが大虫の心裏の琴線にふれ、都的なものとあこがれを感じたのであろう。

新時代をひらくといっても、自分の好む文化がある。これはすでに消失しつつあるのかも知れない。しかし、これを守ろうとする意欲は別物である。単に旧物として葬り去る力を許すことはできない。信長の死にいちはやく批判した長編詩にこの心を見る。しかし、室町文化に止めをさし、関東を一変させた秀吉や家康には一言もふれてはいない。戦乱と名家の興亡を眺めてきた人生八〇年、政権の推移などは重厚な時の表面に浮きまもなく消えるアプロと観じるようになっていたからであろう。

今回、禅学研究への執筆依頼という光栄を頂き、辺土小寺の住職の心情を長沙録に投影し、小文を一筆しました。私の学習の土台の長沙録は先住が光厳寺の原本を昭和一三年、一点一劃をも疎かにせず写しとったわが寺の宝物であります。すでに正法輪誌に私なりの読み下して一年間連載させて頂き、二六項目を学習しました。今回の小文の素材を私が活字化していないものから採ふことを原則としました。活字化はすでに解釈ですし、句読点をつけたのでは度がすぎます。難字異字草字誤字の類は普通字にさせて頂き、その印をつけました。読み違いは多いと思います。他は

原本通りにして二〇項ほどのせて頂きます。静嘉堂文庫本大虫語集と比較するのに便です。なお長沙録の内容についてと題し聖和短大紀要二〇号に発表。雲巖寺本、静嘉堂本をふくめ光巖寺本主体にして内容目次を作成しております。

(1) 松島

海中有島幾千堆 水碧沙明岩上苔
立至夕陽吟不盡 漁舟罷釣入松來
松島道中

円福道場海水涯 穿雲透石馬蹄瘦
擔頭帶雪春風路 似挿梅花一兩枝

宿小浦十王堂

爲起宗風入異郷 半檐借得十王堂

堂中彷彿聞機杼 不意婦人在淨坊

題小浦之門

乘興來販秃比丘 縱無相遇也風流

大千沙界恁麼廣 不恨檀那不點頭

斑寅集卷四(一七八紙)

(2) 後用院主盟即房総大守之師傅而國家之眉目也僉

曰黑衣宰相間出者乎雖久聞風標于今無半面之雅

(三六紙)

(3) 栖徳老和尚忝於子恰如漢光憐。狂奴恩。義猶重豈敢遺忘湘

江一別漸向七梅花矣。惟時癸亥六月不意以事有常陽之行枉象駕於予草廬。東語西話頗作旧時看將謂。始終有故人風焉。法雲一變人境俱奪况於國風之變乎感慨惟夥於爰受相州。大守鈞命被修八州歎血盟不日諸將負刑罪四夷盡。伏幕下措天下

於泰。山這ヶ泰山出老和尚金口者乎誰不瞻仰乎太奇也謹賦
二絕奉呈猊下致和親之至祝且又述再遊佳期云
海内英雄領八垠謀臣猛將屬寬仁炎天梅發大平象南北枝頭
一統春
殘生何許再修盟無限心中散不平別後七年對床語薰窓夜雨
亦歎聲 (五九紙)

(4) 從持氏將軍以來東關之八州如瓜潰就中比年越守

相府兩雄相爭常之氏治公祖左与相甲於爰越軍競來困小田
城甲子孟春廿有八互及一戰挽旗奪鼓咬鏃碎鋒或粉骨碎身
盡孤忠或面縛負荆乞降四面凱歌民家狼烟名藍古剎掃地灰
燼嗚呼時哉人境俱奪東馳西走無措手足地卒扣總隅洞山之
丈室頗修旧盟主翁衣不帶倒履而出迎揖予喫茶商量綈袍之
賜悉々有故人風剩青州。從是斬愁城一関高臥。安眠從前亂裡
之勞若如湯消水也奇快々々聊賦一絕呈上於主盟禪床下
以述再會希有云
何計袞袞染戰塵乾坤無地寄孤身白雲洞裡見挑入高臥安眠
如遊秦 於総州光福寺
桑城之東有古梵宮号洞泉境致勝絕不耐記之四面之青岩一
庭之綠水寸石縮五岳丈波涵十洲剩擣竹樓調茶鼎水禽山鷄
美之撫之其幽趣推知之野柄週日避兵塵之次卒扣丈室主盟
出迎如泪相識或時酌霞醉月或時煎松風聽雨一座菜事至矣

盡矣聊賦一絕述再遊之一端云

四年青朋古梵宮紅塵不到有仙風主人借否巨靈手割取蓬萊
置洞中

(5) 干戈裡看花

乾坤無地賞春光到处園林入戰場花泣楚王雖不逝追亡風陣
一張涼

一箭東風難去辰官梅野柳已成塵願言若有真公劍指日遲々
合駐春

万紫千紅半作空干戈叢裡思無窮鶯欄立盡向花報看箭南來
一陣風

一陣風帥(帥)百万兵猶催雨敵打春城老梅間出眞商暗殿後花王
羽翼成

一陣風魔看祖鞭滿城桃李已寅緣爲花孰作援兵去緘月張弓
松袒肩

廿四春光日已斜千紅入叢思何些風魔雨敵燕軍力即墨城堅
業底花 (一一九紙)

(6) 芙蓉鏡 八朔即席不起座

非臺出水孰磨成錦鏡池邊花幾情妍醜未分何打破秋風一陣
亦東平

惱人國色一枝鮮淡拂蛾眉湖水邊比得相宜王母鏡年々花發
幾三千

芙蓉一枚夷即辰西施惟肖拂眉新鴛來爲現鸞來鸞湖面相交
点不塵
照水團々塵不浮開函風丰好風流一枚芙蓉面般意昨日少年

今白鷗

(7) 待月樓

水殿雲廊乘興登廣寒惜舞意飛騰願言爲月化千億処々樓臺
一野僧

三四更深歷億姦秋爲月上江臺蟠桃花落又佳實王母粧成
鏡未開 同代

奈斯良夜惱吟身廣漢惜晴乘與辰月亦可憐唯獨看拳盃有待
作三人 同代

樓頭捲箔望江濱遙識媚娥愧此身昔日誤遭喚奸賊有何面目
見詩人 同代

浮雲遮處鏡生塵天下白粧猶未新若把媚娥比西子吳王惱殺
倚欄人 同代 (一三四紙)

(8)

夫樂之起本從軒轅帝資始盛于夏殷周之三代唐之玄宗遊
月宮聽紫雲曲默記之版傳名霓裳羽衣曲此即開元太平新曲
也 倭朝自神代以雅樂爲第一上從楓宸下至蓮府專用之樂
之用大哉 惟時元龜癸酉秋之孟忝英檀平胤政公誘引數十
輩年少 八佾舞於庭蓋爲慰予老懷恩義九昇不堪感難者乎
其樂之興時丁々東々之鼓 其聲穿雲漢囉々哩々之笛其響
裂崖崗或時着鬼面震忿怒勢則山崩 石裂 或時顯神德現
威光則日照月臨加之翻羅袖而擬楊妃則海棠睡猶未醒 掃
粉黛兮西施則芙蓉貌彌餘娟 儒積道之冷談侯公之嚴今
手舞足露見聞之妙集以大成矣於爰鬼神落膽丈夫喪魂情
与非情識与不識無不絕倒 况知音之徒乎 先所謂玄宗月

宮之勝遊。三代之礼樂今也如親台嗚呼一日歎懷。不屑王母三千歲其樂。至矣。矣。誠哉。避齡延年之方術也。因賦二章謝勝會之一端云

雅樂與時驚耳目。舞袂歌扇學仙班。延年妙術在君手。白髮相看變綠顏。

洛榭風流舞袖紅。當々撻々響丁東。霓裳一曲知音少。不覺令人無月宮。

(一六紙)

(9) 宋徽宗皇帝專以繪事。為御愛。故彩畫。真跡於今為天下至寶。一日宣和殿中聚畫工之傑。特出畫題云。野水無人渡。孤舟終日橫。寫此趣者。應被拳甲科云々。惟時應勅命者。無少或翹。驚於船舷。或栖鴉於篷背。或舟人携笛。懶眠。此皆圖無人渡。忝觀覽餘一々。稱畫及第。爾來聖朝。貴介公子遊畫藝者。不知幾。千万又黃魯直詩曰。慧宗烟雨芦。鴈坐我瀟湘洞庭。漁扁舟欲歸去。故人言是丹青。此即古今絕唱也。不意福泉老和尚。賜淡墨二六對蓋。平氏幹繁公之筆跡也。觀之者論云。丈山尺樹之幽。寸馬豆人之妙。換郭熙元暉之骨。海外之十州。西湖之六橋。蘆藻之三千丈。淮南之二十四巫山。之十二湘浦。之八景。縮地在片紙。得牧溪玉潤之髓。加之三四落鴈。ノヘ之羽。鷓掛爾者。漁屋。蹈之者。蕉徑。破村之枯木。烟寺。層樓。不下筆。而描其趣。蘇軾云。能畫者盡意。不盡形云云。誠哉斯言。惜哉。雖得鴉鷺之跡。不于宣和寵愛。雖會芦鴈。情不入魯直之吟詠。吁。遇與不過古今一轍耳。予糊之壁上。作吾家尺璧。珍々重々。因賦二絕。呈上福泉和尚。宛床下兼希幹繁公一覽者乎。

寫出江山暮景多。孤舟無渡泛烟波。若逢宣和聖朝代。會日畫工

登甲科

殘月情嵐入畫幽。坐五湘浦洞庭秋。白頭幾被丹青誤。頻喚扁舟(逸?)欲伴鷗。
(三七) (三八紙)

(10) 平氏遠州。大守其為人。襟宇清純。一点無俗氣。以雪月為友。以風花為賓。朝吟暮詠。寒風流一高士也。前年觀上國光之次。倭歌之名。如人物之旧跡。一々以歷覽。取為錦囊底物。豈不快乎。加之從幼。皈依于釈氏。慕入洞上之法戰場。奪五位槍旗。以為自己吹毛。則目前。万境活殺。自將謂馬祖。下出龐老。吁。今世難哉。一日招子喫茶。商量于時。鷗雨(逸?)。蒲花杜若。餘。端午風景。益可愛。時也。忝賢主人。調午鼎。前鳳。固則彷彿。干陸羽之評品。無吟。帳。炷。鷗岳。則依。係于魯直之閑味。其興可知矣。利命六七輩。年少舞袂。歌扇奏一曲。淺斟低唱。飛羽。鷗則泥。絮。禪心亦手。舞足。蹈。可謂干戈叢裡有太平。基祝々。翌之日。賦二絕。謝高會恩。義云。

塵裡偷閑慰老涯。鷗岳相礙映窓紗。使吾不覺坐蓬島。羽化仙方一盞茶。

縹素結交俱拳鷗。其餘何計合歡床。紅花綠舞太平日。白髮殘僧吟欲狂。
(六〇紙)

(11) 渡辺金吾公風流之一介士也。久聞其名。未能半面。雅不意日之先。倡益友一兩輩。扣予柴扉。東語西話。親於十年旧識。嗚呼。騷屑以來。人境俱奪。蓬蒿不剪。莓苔不跡。已終賓。客來往。邇日。繕結把。茅。雖遮風。雨。上。漏下。湿。常堪持傘。於。爰。不及一味野菜根。徒調老釜。煎市茶。以充一盃紫霞。潤。愧惟。晰。漸向昏鴉。飯。駕。無。投。轄。力。翌之日。忝賜。采雲一封。披之。則頗。謝。往。日。禪榻茶話之逸。

興。刺惠銀茄一籠十襲千緡未發封其風味溢齒牙寶々重々

記得寒山老人因衆僧樂茄子次 山呈起茄串向一僧背上打

一下 僧回首山呈起茄串曰是甚麼僧云這風顛漢云 又隋

煬帝喚茄子為紫崑崙到這裡一封米發寒山向何処 呈起仍

述三絕奉謝一籠賜且又及前日來訪之忱謝云

銀茄惠得自芳園九昇猶輕雨露思恐是寒山難下箸一籠緊紫

崑崙鑰四字上?

一啜松風當紫霞結交縑素與何些愧吾瓦金被君咲槽拙魚煎

魚眼茶

三遙秋荒由織喧兵餘無客扣柴門何量古砌迎君後始着莓苔

有履痕 (七六紙)

(12) 夫為人達六藝文武倭歌之道兼全稱之風流主張亦宜哉粵

朝比奈金吾公後府之英產而實風流之一人也走孕Y童詣公

姓名可謂文武倭歌六藝共備 嗚呼令世難哉不意後陽驪屑

後西泊東漂之次寓居矢作城一日扣予岩戶清話移刻惟時仲

冬之交吹殘紅葉一片二片從寬水流出浮小池公一覽之餘出

發句云むすびとめよ紅葉はなかつたきのいと予不堪默止

對之云 波紋猶練鴛鴦 珠魚曰一貫而和漢會一折一座逸

興至矣尽矣

古德之竹筧二三升野水松窓七五片閑雲又李太白題 廬山

瀑布云飛流直下三千尺疑是銀河落九天是即古今絕唱也如

子寬水其高不過數尺 今也公詠歌之後其名益 諸方則平

視廬瀑三千尺仍賦一絕嘆美公才德云一笑二三升水野而幽

紅葉為君一片浮數尺寬泉詠歌後高於廬瀑九天流

江湖歌人一鷗(七七紙)

(13) 伴鷗齋主盟者從幼倭歌之道為家業振芳聲於夷洛馳情志

於支竺僉曰閱之以東英特之一人也其行履也賞春夏秋冬為

賓客弄風花雪月為良友孤加之慕日本武之跡則既秋月於筑

波山歸管丞相之道則拜寒梅於北野廟 某州某境扣名藍探

勝概人物之美歷覽聖賢之芳躅故朝吐片詞暮傳四海走孕誦

公Y童知公吁若人今世難哉矣吾祖達摩大師得々來於和州

片崗山与豐驗帝子相見了有二首倭歌奉世傳之歌也詩也禪

也教也取以飯一致權與於片崗大興於桑城主哉倭歌大哉倭

歌矣老拙甲子冬之孟避閑左之騷屑就城府之古刹分半間之

雲臥北窓之雪漸至乙丑之春惟時二月細雨蕭々添旅齋之花

一点二点 半開半落誠可惜時也於爰忝主盟投倭歌一篇被

訪旅寓之寂寥洗乎薔薇露圭依之則專被賀予錦旋末稍决灯

之一字這ヶ一燈得達磨之骨髓奪豐驗之眼目先所謂禪道佛

法本於片崗之一首風賦比興之靈焰續普聯廣之心灯以心傳

心以灯傳灯々相傳到千万世輝騰古今照破万世日月齊其

明与天地同其德祝杜少陵不謂乎万事既黃髮殘生隨白鷗

云々借此語為予肥遁素志者乎因和灯字以呈於主盟之吟案

下述忱謝之万乙云

誰憐旅寓水雲僧温問何量記我曾從是隨鷗鷗許否葦林燒多

約漁燈 添鮑足云

六義元來飯大乘倭歌骨髓獨輝騰風花雪月君襟宇統得少林

那一燈 (七四~七六紙)

(14) 梅之紅者一枝投贈于伴鷗齋下副以小詩掛枝上云宜雪橫

斜雨亦奇晚梅添色映疎籬請君今夜宿花去來日春風未知

(七三紙)

(15) 日之昨紅梅一枝呈寄于伴鷗齋吟案下副以野詩主盟即以
倭歌唱和於爰長與老和尚擊節呼大雅遺音洋々而盈耳哉自
今以往執繙素之事于日于花敲推約則豈非遠陶陸之社盟乎
再依尊韻云

繙素結交金石媒有花門戶共君推社盟若許殘僧去三笑盈橋

松竹梅

(七四紙)

(16) 夫宮木野者秋花之絕品也蓋從奧北宮木野出故以出所名
之漢土曰之秋倭國曰之宮木野其名雖異惟惟同日之昨扣地
福禪利清話移刻之次有風流客卒然携宮木野一枝添以竹葉
弄之酌之可愛可樂矣難默者乎聊述一絕謝恩義万乙云

宮木野秋猶勝春一枝帶霞淡粧新此花若作盡遊錦喜我飯期

朱買臣

(七三紙)

(17) 乙亥 春之孟觸蚤相戰矢作城外一時焦土愚庵亦羅 災
火厄庭前數株之梅松拂地作單竈之薪豈無感慨乎杜甫所謂
感時花濺淚其謂之乎不意丙子之春 光福老和尚泰賜梅之
為紅白者數枝恩義之所重超於華袞之寵於爰進憶予栽培之
花竹實情所銘因賦二絕呈上 衣鉢閣下以述忱謝之万一云
安樂主人惟德不及花和氣點無私為梅天亦避兵火東魯靈光
鶯宿枝

(18) 古人之夫執交有等差扱後交清交也交後擇污交也云々蓋

清交者一理交盟則約天鳥地枝堅金期石諾始終一節而不違

是即君子人之交也其污交者縱然歎血雖執盟口血未乾論紅

是白非扱高貴卑賤朝揖袂拍眉夕寄絕交書是君子人之所不

執也予江湖一散人何幸於尊美文執葭玉之交泰(季)玉趾于

月于花絲來綿去寒千歲一遇也適日借鷗鷗舌妨鷺鷥約咫尺

天涯肝膽楚越吁佳人者絕代之美而胡為執污交乎因賦一絕

奉寄于玉案下述不備之情

代人

有約不來思万重灯前擁被聽松春愁一夜頭應白月落層樓

花外鐘

(七三紙)

(19) 天正丁丑於繪之大龍精舍臘月十二之曉夢入一伽藍佛宇
僧房巍々堂々予逡巡而立多時於粵鬢眉皓白之僧勃然而出
來扶杖問云何處僧予答曰入門不見額如何是寺号老僧笑吟
五言詩一聯云管君有遺廂和雪一枝開南北春無隔五雲天上
梅予低頭而記取之忽然而老僧化去殿宇亦作無何鄉夢醒暗
中記之予感嘆之餘到天明奉和夢中之韻以獻納管君之遺廟
翌年戊寅十月趣下野州雲岩之屈請吁前年夢中所見境致一
絲毫不移易就中鎮護之神安北野夢裡稽首之老僧即 開山
佛光耶佛國三佛之中一尊不足怪之從戊寅冬至辛巳之春漸
經四歲不意東山之老少抽丹心 英檀々之力被督予軀住
庚辰之冬命介使上洛忝 龍安月航和尚大禪師并本寺之著
宿卒蒙推揆一諾殊被達闕下臘月二十二日宸翰拜賜辛巳二
月二十三於東山頂戴之曠昔丁丑之夢中五雲天上梅如合符
節希有也太奇真亦夢也 夢亦真也真夢間不容髮記取之又
夢中說夢之謂乎謹奉和夢中前韻以再獻納於

靈廟 伏乞

千億分身化花去扶桑震旦笑顏開菅君師範皆成夢覺後猶香入室梅 神鑑

獨步青雲有神助禁門銀鑰為吾開袈裟持咒拜花去和夢飛來奉勅梅 辛巳宸翰拜賜之後再奉和前詞 (五〇紙)

(20)

濟庵刺手逢着金剛玉後踞虎頭收虎尾威氣天然 人皆識之願一揮全剛王掃蕩于戈麓裡塵紛敲磬門庭嚼破東海鉄崑崙必知沒滋味之處有滋味若是与麼看春向花園活一步途程若涉此地可抽粉骨岐陽也甲陽也信陽也皆是花園之枝、也急須進一步者乎因記慈明往昔易服混軍伍到汾陽終扶起遮道尊老効慈明者為宗門功第一也至祝、、春猶寒為道保安伏惟恐惶稽首

猪日 永祿九年 丙寅 正月也智覺拜手

拜復 東昌寺侍衣閣下

(21)

夫勸梵漢文字之起本或曰伏犧時或曰黃帝時從伏犧即位 天元 甲寅 至日本天正九年 辛巳 二兆七億六万二千八年也從 瞿曇末生塵劫以前梵漢字有之佛豈制之況於日本聖德太子 吉備公傳教弘法之徒乎多不見之伏犧即位後商迦羅天鼻仲 天婦產三子波羅摩迦羅蒼頡彼兄弟始作文字波羅摩於西竺 作梵字迦羅摩於胡國作伽書蒼頡於震旦作古文字此即文字 海濫觴也吾佛初從鹿死終到鶴樹四十九年半滿頓漸通別圓 教橫說堅說曰之大藏經是根多之梵文也漢明帝時摩騰竺 法蘭四十二章經白馬馱之來於爰麟梵文作漢字板行流布天 下般若六百卷

玄并麟之法華七軌鳩摩羅什譯之吉備大臣玄昉上人入唐時 玄昉度藏經於扶桑矣抑本朝分八宗法相三論俱會成実律教 淨土就中天台真言此等大乘宗師也台教者如來後融妙旨龍 樹尊者得之以智者為高祖最澄弘之寂照入宋持諸經來從此 昌密宗者如來受用之密印龍猛菩薩自南天鐵塔得之二百余 部訳之本朝廷曆末傳教弘法一時異受台密有慈覺智證東密 有小野廣沢盜四海云所謂八宗之根源從世尊胸襟流出蓋天 蓋地這裡何有優劣吁悲哉今當五、百年濁世末法八宗共滅 其宗旨從益多聞增長人我見事鬪爭於粵天正九年 辛巳 秋之 孟闕之以東常州

佐竹郡洞上与密宗有詰難問其故或者曰洞下衲子浮屠銘書 梵字密宗無之曰梵字吾家傳他宗不可書之又四十九院佛塔 是又在高野而已他家不可有之吁可憐生古語曰認他財為己 宝之謂乎世所傳弘法大師日本四聖人之第一不啻入唐耳無 端度天与文珠大士相見了扶桑掃朝日嵯峨天皇御宇接之玄 蕃寮即改此寮成東寺住持之一代化佛稱小釈迦亦宜哉其末 裔而味其宗旨堪嗟嘆者乎夫弘法八宗兼學專參吾達磨禪宗 派載之昔日東寺立一碑其略曰西京大悲和尚弟子空海內證 酌曹溪流化他統惠果灯云云又碑文云西京大悲安然和尚云 大師所承血

脈者乃在三譜一達磨傳授正法二天台相承三真言密付也 云云 夫台教空假中之三觀密宗有瑜伽三密者身口意三業

也瑜伽訳之則相應也身口意相應如如意圓滿又阿字之觀法阿一字齋之則無也吾宗有趙洲州狗子無佛性話無門開和尚拈之曰只者一箇無字乃宗門第一関目之曰禪宗無門関若參無字則莫作虛無會莫作有無會如吞了箇熱鉄丸相似吐又吐不出云々又云只者無字倚天長劍如塗毒鼓云々且道一箇阿字掃何処三世佛心印人々具足箇々圓成一如来乾坤大地山河草木春夏秋冬日月星辰蠢動含靈收以掃阿一字拄天拄地森羅万象齊漏世鴉鳴

鶻噪松風蘿月豈非浮圖之三摩耶形乎燕語鶯啼桃紅李白谿開兜率四十九院頭々物々現毘盧法身拈阿字一劍則截斷万機自前不立一法此即八宗如来藏之一宝也悲哉密宗不徹阿字觀法着梵文不離假相夫刻木浮屠建四十九院悉從如来金口出者乎權立化城濟度迷倒衆生故經曰衆聖中尊世間之父一切衆生皆是吾子云云為什麼為密教一宗說彼大藏乎若又佛為密教一宗說之則為什麼流布閻浮提内吁此一落索三歲孩兒亦所弁也又四十九院者兜率天宮龍華樹下弥勒大士說法之時四十九佛輔佐之最初号恒說華嚴院此主即毘盧舍那終号常行律儀院此

主即釈迦牟尼佛其院者梵曰羅摩又曰波演那漢曰院是諸佛安住処也到這裡三世諸佛百億分身入凡入聖入淨入穢濟度三界或時登仞利或時入泥犁應物現形釈迦是牛頭獄卒祖師是馬面阿婆入驢胎借馬腹嘗苦喫辛娑婆往來八千度一月在

天如影浸衆水是皆濟度利益誓願也佛於跋提河說涅槃經了曰四十九年一字不說看々瞿曇露些子鋒鋷到衲僧面前佛是乾屎橛麻三斤一大藏經拭不淨故紙梵漢文句七々之塔木浮屠之形假尽是止啼黃葉標月指也胡為密宗着表相秘梵文為我有阿呵呵承聞今夏於佐竹洞上密宗已及宗論未究一問真言惡比丘懷

刀子袖鉄鎚帶干戈二百餘輩打困洞上洞上衆或喫痛棒或蒙瘡古今未曾有歟昔日醍醐天皇聖朝北野御所代於洛中新建立五山御願。砌山門三井東寺奈良四ヶ諸講師其數三千八百有餘其中棟梁山門之玄惠法印三井寺僧正東寺虎聖奈良阿一聖人是等四人張本人以牒狀言上無今古哉何於洛中可建立五山事与禪宗成宗論日本國中無一人悉可拂禪宗云維時元弘四年正月於清涼殿宗論紫野大德寺開山妙超侍者蒙勅參内侍者取杖拂向帝王白今日宗論以一言可理負者作下部帝王用此語与天台宗論請勅玄惠法印出問如何是教外別傳師答曰八角磨

盤走空裡法印不會此語即作下部其名曰宗疑次三井寺僧正携箱置師面前師問曰是何物僧正云此是乾坤箱師以杖一擊曰乾坤打破時如何僧正不及答話即為下人其名曰宗圓二人共昇輿行紫野建立大德寺此是醍醐天皇勅願所也宗論略云廿一日晚南禪寺正眼院長老大光國師蒙勅參内東寺虎聖參内出問如何是禪國師拳扇子云爾。試射看虎聖云中師重袖扇

子云箭已離紋猶無返廻勢尚射看虎聖良久云禪既尽而已師曰欲知吾宗白雲隔万里虎聖云禪得而可聽哉師曰近前來向爾道虎聖近前一足踏倒虎聖起來三拜而取弟子例其名云宗虎三大將已

被取頸殘党不全者外三千八百有餘皆悉掃伏同取弟子例右一件事蒙輪命於今洛陽五岳措之天鑑無私今也於佐竹爭論於市巾草堂傍可癸一笑若強及宗論其州太守殿閣集一門之國老君臣列坐備奉行設警護於傾聽処互一問一答之上決斷宗師之長短則是非乍顯露彼爭論洞上密宗俱敗嗣不少吾宗不守一隅始學顯密教後掃別傳宗師建仁開山明庵禪師登叡山極台教後入宋國參禪洞上永平開山道元和尚登橫川首楞嚴院礼公園僧正薙髮十八歲中二閏大藏後參建仁明庵々々為法器從明全入宋掛錫天童云云上野長菜寺於今從開山榮朝寺中立真言

院児孫修密法云云加之紀州由良開山法灯國師十九薙髮上高野山染指三密後入宋國參佛眼掃朝後閑居高野云々到吾禪不論自他不瞞人我專以此事為本弘法大師顯密後掃吾宗又天台座主教多極台教入唐參吾宗掃朝住叡山云々此語載五灯會元事跡繁多故略之不記姓名看々教外別傳端的木浮圖銘書佉伽羅婆阿亦不妨書篆漢字亦得倭字書伊呂波仁浦邊登亦得拈一莖草作塔婆亦得喚拄杖作四十九院亦得不書一字不加一点舍那妙体塵々刹々顯現正恁麼時何認梵漢

之文句爭人我乎夫悉曇之法古今無師傳則難書之縱雖達漢篆之字於梵字筆法

不學之而強難書之若逢傳授之師則何宗書梵字亦不妨無傳授之師而任愚見私書之者罪過弥天謹白諸宗統到五々百年世尊大慈大悲廣恩粉骨碎身難酬之吾儂方袍圓頂着仏衣誦佛經唱仏語喫仏飯形似沙門心無慚愧刺三家村裡魔魅人家男女賺殺漁樵蠶夫殊不守不自讚毀他戒如此徒党十ヶ八九有之夫洞密爭論之起本畢竟從貪欲一念資始相共悲哉滅佛種族伏乞諸宗他弓莫挽他馬莫騎他非莫弁他事莫知他是阿誰努力諸人本仏遺戒各自守封疆則諸宗之門葉宗枝日々繁茂西飛仏日再發光輝則稱之釈氏亦不妨者乎山居樵子不省微分傍觀嘆吁之餘記之以為行力僕戒旃

維時天正九年辛巳孟秋日 山居樵子謹記之

○異字
◎略字

二↓三。監↓蓋。今↓分。知照↓智證。尤↓無。番↓著。烈↓列。源↓元。
長沙録百十丁より写本の一頁を一行あけて示した。

宗論

後醍醐之天皇之御宇北之御所君臣同道依御願新可建立五山山門三井寺奈良四箇大寺諸匠師等其數三千八百有余其中大將山門玄慧法印三井寺僧正東寺虎聖奈良阿一上人是

等四人張本人也彼等同心以連狀申様無古今事也何於洛中可建立五山也與禪宗作宗論日本國中無一人可弘之云云
 于時元亨四年正月廿一日於清涼殿宗論紫野大德寺開山山妙超侍者以弘子向帝王奏曰今日宗論以一言可理負者即作下部帝已以此語天台宗與禪宗令作宗論請勅則玄慧法印出問如何是教外別傳師曰八角磨盤走空裡法印不会此語即作下人其名曰宗佺次三井寺僧正携箱來置師面前師曰是何物僧正曰是此乾坤一箇箱師以拄杖打碎曰乾坤打破時如何僧正不会此語即作人其名曰宗円二人共與駕婦紫野此時建立大真寺此是後醍醐天皇勅願所也同廿二日暮虎聖奏曰昔宗論第數度至為七日七夜今宗論如何可限一問一答哉今度南禪寺正眼院長老蒙勅參内其名曰大光円師是廿二日暮也虎聖遣一人弟子教令問如何是禪師彈指一下曰此声徹梵天汝還聞否便疑議師曰匠師不会此問答被追立座席從此至廿三日俱舍宗成実宗律宗此宗極小乘宗也三論法相華嚴此三宗權大乘宗也各々以諸經文釈義等種種難致難問一言不達道理漸至廿三七日之晚東寺虎聖參内問如何是禪師曰箭離絃猶無返回之勢聖曰我宗亦如此師曰如何是聖曰尽大地是師良久拳扇子曰汝試射看聖良久曰禪已尽世師曰適來許多之說話応汝來儀欲知我宗白雲萬里隔聖曰得可聞哉師曰近前來向汝道聖近前師一足踏倒聖起立三拜為師資例其名曰宗虎於此帝王大悅群臣加仰三大將被取頭不全殘党者其外三千八百余皆婦伏同弟子例此時禪宗開運故建立天龍相國各五山平均圓也其外諸門徒自宗論以來到末代諸宗之頂上

也因之譽名於天下播榮於扶桑此之時也矣

村上天王^{乙未}和^三癸亥八月二十日山門南都於清涼殿宗論

此元亨四年以前三百五十二年成

奈↓奈 請↓匠 長↓張 摩↓磨 第↓弟 円↓国？
 部↓都